

## 自然哲学から見た人間と自然の共生



若 者

小林 卓也\*

Rethinking the Relationship between Human and Nature through Philosophy of Nature

Key Words : French Philosophy, Nature, G. Deleuze, Kant, Anthropocentrism

### はじめに

古代ギリシア以来、自然哲学は、「自然とは何か」「自然は何から成っているのか」を問題としてきた。しかし直ちに気づかれるのは、このように問われる自然のなかに、このように問う人間がすでに含まれているということである。人間は自然の外部から自然を問うことはできない。人間もまた自然の一部であるからだ。

しかし「人間もまた自然の一部」といった常套句にもまた注意が必要である。人間が自然の一部であることは事実だとしても、自然の一部をなす他のものたちとは明らかに位相が異なる。産業革命以降、人間の経済活動は著しく発展し、その規模を拡大させてきた。資本主義経済の名の下、人間は膨大な量の化石燃料を燃やし、膨大な量の二酸化炭素を排出し続けた結果、近年の地球の年平均気温の上昇、それに伴う海水の酸化や海面水位の上昇、暴風雨等の異常気象を引き起こし、もはや修復不可能なまでに地球環境を損なってしまった。人間は、膨大な量の生物種を絶滅に追いやるとともに、その被害は主に沿岸地域に住む人々の命や生活を奪う形で、皮肉なことに人間自らの生存可能性を奪いつつある。

このような事態を引き起こしてきた思想的背景のひとつにあるのは、人間をその一部に含む自然を、無尽蔵に産出される資源を蓄える全体とみなす先入

見と、あらゆる科学技術を動員し、自然環境を人間の生活、社会、文明に適用すべく、農業的、工業的に変形・加工することを「進歩」とする人間中心主義的な考え方である。人為起源で引き起こされる気候変動を前にして、今あらためて問い直されるべきは、こうした人間中心主義的な思考の弊害であり、求められるべきは、これに取って代わる人間と自然とのあらたな関係を思考することである。

昨年(2019年)、私は博士論文をもとにした『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』(法政大学出版局)を上梓した<sup>(1)</sup>。そこで論じたのは、現代のフランス思想を代表する哲学者であるジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze 1925-1995)の思想的変遷であるが、とりわけ、彼が1980年以降に精神分析家フェリックス・ガタリ(Félix Guattari 1930-1992)と共に展開した自然哲学には、人間中心主義への批判と、人間と自然との関係をあらたに考えるための論点が見いだされる。

### 人間中心主義の典型としてのカント哲学

ドゥルーズによれば、人間中心主義的思考の典型はドイツの哲学者カントの考えに代表される。今、目の前にリンゴがあるとしよう。手に触れると冷たい手触り、わずかに酸いた香り、鮮やかな赤さを私は感じ、これらをまとめてひとつのリンゴと名指す。このときすでに私は、バラ科リンゴ属という種としての「リンゴ」を前提するとともに、そこから区別される個物として目の前のリンゴをとらえている。さらに、この個物としてのリンゴに私が感じる手触り、香り、赤さは、触れる箇所や遠近、光の具合によってそれぞれ無際限に変化する度合いを持っている。しかし私は、これら度合の無際限を捨象し、「温冷」「香り」「赤み」といった質としてこれを捉えている。さらに言えば、この認識は、リンゴを目の前



\* Takuya KOBAYASHI

1981年4月生まれ  
大阪大学大学院 人間科学研究科 基礎  
人間科学専攻(2011年)  
現在、大阪大学大学院 人間科学研究科  
評価資料室 助教 人間科学博士  
哲学  
TEL : 075-777-2958  
FAX : 075-777-2958  
E-mail : takuyak56@gmail.com

にした今この瞬間に生じており、同じこの認識が同時に他の瞬間、他の場所において生じることはありえない。すなわち、この認識は、空間と時間をすでに前提にして成り立っている。このように、カントによれば、人間の認識はいついかなる場合においても、量・質・関係・様相からなるカテゴリー（純粹悟性概念と呼ばれる）を前提にしているし、時間と空間（直観の形式と呼ばれる）を介して与えられることが条件となる。これらの条件を欠けば、ひとつのリンゴはもはや、手触り、香り、赤さといった質的な区別もつかず、ただの無際限な感性の多でしかない。そして、このように考えているときもまた、多（数多性）という量や、ない（否定性）といった質を前提に私たちは思考せざるをえない。つまり、カント哲学が提示するこの認識の条件は、今日の前に現前しているものを認識する場合だけではなく、かつて存在したものの、いつか存在するもの、存在することができるであろうものにも適用される、いわば、私たちのあらゆるすべての経験が可能となるための条件であるということである。

### カント哲学への批判

人間の認識が成立する条件およびその範囲を画定し、その内部においてのみ人間の思考の側と世界の側との一致を保証するカント哲学は、カント以降の哲学的思考に多大なる影響を与えるものであり、自然科学的探究とも極めて親和性が高い。

しかし、カントが主張する経験の可能性の条件もまた、暗黙的に前提にしていることがある。それはすなわち、思考（概念）や感性（直観）といった人間の諸能力は、つねに一致協働しあい、調和的、統合的に機能するということである。そこでは、何かしらの精神的な疾患により思考する能力を欠いた人間や、何かしらの障害によって身体能力に欠損を持つ人間は、あらかじめ暗黙的に排除されている。そのうえで、正常な精神と身体能力を備えた、数的に多いとはいえ一部の健常な「人間」を特権視し、これを、あらゆる人間の経験可能性の条件に適用する模範とすることでカント哲学は組み立てられている。

ドゥルーズは、感性、想像力（構想力）、思考といった異なる諸能力が、同一性を保つ「私」や自己において協働することを自明視し、これをあらゆる

経験の可能性の条件とするカント哲学の人間中心主義を批判する。カントは、直観の形式と純粹悟性概念を通して私たちに与えられるものを現象と呼び、その範囲内において自然法則が成立し、私たちの認識は可能になるとする。しかし、私たちの経験やその対象を、こうした現象の範囲内に限定した途端、では、現象以前に私たちに与えられるものは何なのかというあらたな問いが生じる。カントはこれを物自体と呼び、それが存在するか否かは問題となるだろうが、それは私たちの認識の範囲外に及ぶ以上、少なくとも、それを経験することも、それがどのようなものであるかを認識することも不可能であるとする。しかし、こうした経験不可能性や認識不可能性を引き起こしているのは、「人間」を模範に認識可能性と認識不可能性の画定を行うカント哲学の体系性以外の何ものでもない。

ドゥルーズの関心は、私たちの経験や認識を、カント哲学の人間中心主義的な形式的原理に還元することなく、経験しうるもの、思考しうるものとは何なのかということに向けられる。そして、人間中心主義に取って代わる思考様式を、自然の運動性のなかに見出したものが、彼独自の自然哲学である。

### 人間と自然の共存を再考する

ドゥルーズの自然哲学が示すのは、人間と対立する自然でもなければ、その一部に人間を含む全体として対象化される自然でもない。そうではなく、その内部において存在する事物や、生息する個物、さらにはそこで生じるさまざまな出来事のあいだで、倦むことなく絶えずあらたな関係が創造される運動体としての自然が示される。

たとえば、雀蜂は、蘭と蘭のあいだを行き交い、媒虫として雌蕊から雄蕊へと花粉を運ぶ。このとき蘭の唇弁は雌の雀蜂の形状を擬態し、雄の雀蜂をおびき寄せると言われる。しかし、当然ながら、蘭が意図を持って雀蜂を誘惑しているわけではない。あらゆる目的論（これもまたきわめて人間的な前提である）を排して自然を見たとき、そこにあるのは、蘭と蘭のあいだを飛び交う雀蜂の運動だけである。ドゥルーズおよびガタリは、雀蜂の運動が蘭の唇弁に接合されるとき、雀蜂は蘭の生殖器へと、蘭は雀蜂の生殖器へと生成変化すると考える。

より詳細にこの事態を見れば、蘭、雀蜂、飛翔、

花粉、付着、受粉といった異なる複数の要素のあいだで、蘭の唇弁に接する雀蜂の運動が、蘭の生殖（再生産）を表現する例示物、いわば、蘭の生殖器として再帰的に自らを構成し、同時に、蘭の唇弁もまた雀蜂の（偽の）生殖器に変化している。このように、ある個物が自らに固有の特性（昆虫種、植物種）から離脱し、（この場合は生殖という）あらたな性質を生じさせるとともに、それを表現する事例（生殖器）として再度、自らを構成しなおすというプロセスを、ドゥルーズおよびガタリは生成変化と呼んでおり、蘭の唇弁の形状が雀蜂の形状に類似すると言っているのは、こうした自然内部における再帰的構成の結果にすぎない<sup>(2)</sup>。

このように考えると、自然とは、異なる要素間のあいだに生じる運動と静止、速さと遅さによって構成されるリズムや生成変化が接合しあい、増殖し、共存する平面であるといえる。

個体と個体のあいだに生じるリズムや生成変化は、両者が出会うその度ごとに編成を繰り返す、それによって両者の項が規定しなおされる。この編成は、個体と個体のあいだにおいてだけではなく、集団へも拡張される。すなわち、個体 (a) と個体 (b) だけではなく、それら個体と個体からなる複合的關係 (ab) は、別の個体 (c) あるいは別の任意の複合的關係 ( $\alpha\beta$ ) とさらなる複合的關係 (abc あるいは  $ab\alpha\beta$ ) を作り、さらに、これら複合的關係が再度別の任意の個体 (d) や複合的關係 ( $\gamma$ ) とあらたな複合的關係 (abcd あるいは  $ab\alpha\beta\gamma$ ) を作る。このように、個体と個体、個体と集団、集団と集団とのあいだで生じる関係は、別の個体ないし集団との関係のなかに組み込まれ、その範囲は分子、動植物、人間、社会へと無際限に拡張されていくことになる。

ドゥルーズの自然哲学においては、人間と自然、

精神と物質、主体と客体、個人と社会といった固定した項や、一方に対する他方の優位といったものは存在しない。とはいえ、それは、無秩序に、乱雑に運動する自然のうちに回帰し、人間を霧散してしまうことを意味しない。ここに見いだされる自然内部の運動性は、生物学や生態学をはじめとする、あらゆる科学的認識によって見いだされるものであるからだ。重要なのはむしろ、科学を含む人間のあらゆる認識活動、思考が、これまでよりも微細に自然の運動を記述することが可能になればなるほど、それに応じて人間の思考や存在の在り方、それ自体が変容を被るということである。ドゥルーズの自然哲学は、人間と自然を混淆させ、両者の区別を霧散させてしまうのではなく、人間の思考と自然のあいだの相互的、累進的な編成のプロセスを提示している点に独自性がある。これにより、主体と客体、精神と物質といった従来の二分法的区分は、はたしてどのように組み替えられ、またそれが現代における人間、事物、動植物、技術、産業の共生や共存を考えるうえで、いかなる手がかりとなるのか、これが問われることになるだろう。

## 謝辞

最後に、本誌面にてぜひ拙著の解説をと、大変貴重な執筆の機会を与えてくださった、大阪大学大学院人間科学研究科の三好恵真子先生に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 小林卓也『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』、法政大学出版局、2019年。
- 2) 菅野盾樹『示しの記号：再帰的構造と機能の存在論のために』産業図書、2015年、第6章参照。